

なきごえ



1981

3

大阪市
天王寺動物園協会

動物と私

なかまきねのり
中 間 實 徳



戦前私は、鹿児島市立鴨池動物園にあまり遠くない所に住んでいたため、小学校へ上がる前から父や姉に連れられてその動物園をよく訪れた。サルを見ているととても面白く飽きずに見

ていたものだった。動物に対する親しみと好きだということから、中学生のとき父に相談し、鶏(15羽)、アヒル(6羽)、兎(7頭)を家で飼うことにした。これらの世話は勿論、全て私の日課となった。アヒルは学校から帰ってから毎日、近くの小川まで公道を100mほど歩かせて水浴に連れて行った。数日もすると、アヒル達はすっかり道を覚え小屋の扉を開けると尻をふりふり一列になって勝手に小川へ行っていた。1時間位遊ばせては棒切れで後を追いかけて家へ帰らせていた。慣れてくると私が付き添わなくても2~3時間遊んでは勝手に夕方の餌の前に帰ってくるようになった。或る時いつもの様に放してやると、ものの30分もしないうちにけたたましい大きな鳴き声を立てて飛んで帰ってきた。びっくりして外へ出てみると、野犬に追われたためと判ったが幸いけがもなく皆元気であったので安堵したことがあった。その後はまた、以前のように付き添うことにした。鶏にもいくつかの思い出がある。鶏は卵を午前中に生むものが多く、学校から帰った私は、8畳ほどの鶏小屋へ入り、大きな名古屋コーチン種の雄がかかってくるのを避けながら卵を集めるのが楽しみだった。或る頃から若鳥の何羽かが卵を産むようになったが、一番ケンカの弱いカラスのような色をした雌がいつも小屋から抜け出している日が続い

た。不審に思ったので、その鶏が動き廻るヤブを調べてみると、驚いた事に10数個からなる卵の山ができていた。この鶏は卵を産む時間になると巣箱が皆ほかの雌鳥に取られてしまうので、ケンカの弱いこの鶏には空いた巣が当たらなかったわけである。そのため天井近くのわずかな隙間から、外へ逃げては自分だけの巣を外に作って卵を産んでいたのであった。その後、巣箱を増やし、逃げないようにしてやった。

父の仕事の都合で、高校生の時大阪市内へ移ったが、或る時、母と一諸に市場近くの露天店で10円ピヨコを8羽ほど買った。未だ肌寒い頃だったので、電灯で保温して飼育したら全て順調に育ったので、家の建ち並んだ街中ではあったが、屋上の物干し場に鶏小屋を作って成鶏まで育てあげたこともあった。

そんなこともあり、大人になったら広々とした田舎で牧場を経営しようと考え、大阪府立大学獣医学科へ進んだ。卒業してからは、牛の臨床のできる農業共済組合連合会の獣医師として就職したが、1年後には恩師からの声がかかって母校へ帰り、専ら家畜臨床繁殖学(人の産婦人科学と泌尿器科学に相当する学問)を中心に仕事をした。10年余り前からは、犬、猫の外科診療もやるようになり、アメリカの獣医科大学へ留学中は牛馬から犬猫や小鳥までの臨床を勉強した。

また、2人の娘も大の動物好きで、大阪近郊の動物園とくに天王寺動物園へはよく行ったし、動物園のサマースクールへも通わせてもらった。1昨年3月のアメリカからの帰国時には、サクラメント動物園、サンフランシスコ動物園およびハワイの動物園へと一家で見つめたものだ。今でも新しい土地へ行ったら、先ず動物園を訪れたいと思っている。もっとも、今では動物の管理状態や毛艶、歩き方、糞尿のことなど健康状態が私の眼に付きやすくなってきたのは仕事上止むを得ない。

動物園の動物達がどんなものを食べ、どんな生活をしているかを見てまわることは我々一家の楽しみのひとつになっている。

(写真:愛犬とともに)

(山口大学農学部獣医学科家畜外科学助教授・農博)

なきごえ3月号もくじ

動物と私	2
トラの赤ちゃん	3
動物園グラフ・日記	4-5
東アフリカ紀行(Ⅲ)	6-7-8-9
北米通信員だより ③	10
動物園ニュース	11

表紙の写真説明

“オグロワラビー”

オーストラリア東岸に分布するこのワラビーは、名前のように尾が黒色のカンガルーの仲間です。当園では3頭繁殖に成功しています。

(撮影: 葭谷 文彦)



“トラの赤ちゃん、ただ今人工哺育中!!”

このトラの赤ちゃんたち、1月20日に生れたのですが、母親がどうもめんどうを見きれないようでしたので、人工哺育にかえました。共にメスで順調に育っています。

(撮影: 森本 委利)

動物園 グラフ

“きらびやかな仮面舞踊会”

キジの仲間たち



オジロコシアカキジ

中世の騎士の鎧甲を彷彿させます。興奮すると肉冠肉垂れがぐーんと大きく立派になります。シマハッカ



3月に入りますと日増しに春らしくなってきます。園内のキジ舎、クジャク舎、水禽放養舎などではオスがきれいな衣装をよりきらびやかに美しくメス達に見せてダンスの真最中です。禽舎のあちこちで羽を一杯に拡げディスプレイをしたり、愛の歌をさえずっています。今日の舞踊会にはキジ達はどのような仮面をかぶり羽根飾りをつけているのでしょうか……？ ちょっとのぞいてみましょう。

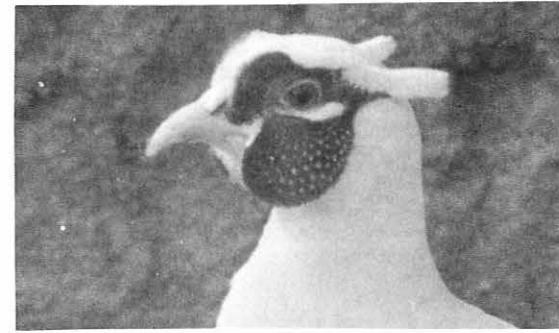
(撮影・文：中川 哲男)



シロカケイ

頸から耳にかけ白い羽根がうしろにピンと張っています。このことから一名ミミキジともいいます。この羽根飾り、前からみますと明治時代の元勲長老が生やしていた「カイゼルひげ」を思い出させます。

アオカケイ



シロキジ

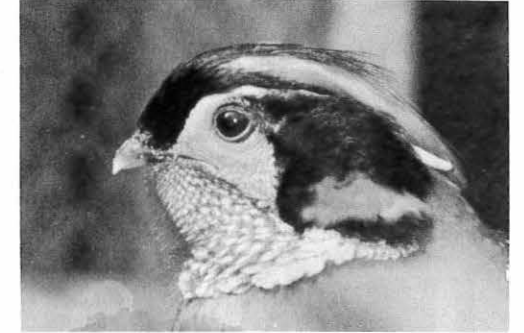
最もキジらしい体型。興奮すると頬の肉垂れが真真赤となり、羽色と対称的なコントラストとなり見事なものです。

カラヤマドリ



ギンケイ

頭部の羽根は戦国武将の甲のようです。マツカサのような模様はディスプレイの際、ぐーんと大きく拡がり、これでもかとメスの前でカッコよく見せつけます。



ベニジュケイ

キジの仲間としてはズングリムックリの体型。しかし、頬と肉垂れの色羽の色は見事なほど、さすが中国産だけあって京劇のメイクアップを思わせます。ディスプレイの際は、のど袋の肉垂れがコバルトブルーに輝き、下へ大きくふくらんで伸びます。みものですよ!!



アオエリヤケイ

多元説では今のニワトリ発生の起源ともいわれていますが…、他の野鶏とちがい肉冠が一山で切れこみがありません。美しいピンク色の肉冠と肉垂れが優雅です。

如何でしたか。今日はほんの一部をごらんいただきましたが、当園のキジの種類数は日本有数でキジ目として44種、特にキジ科を42種展示しています。これから4月、5月にかけてキジ類が美しくなる季節です。毎日開かれる舞踊会にご参加下さい。

1・2月の 動物園日記

- 1/16. アビシニアライオンが流産しました。
スのマレーグマの元気がなくなり衰弱気味だったので寢室に収容し治療を始めました。
- 1/17. 中国の上海市杂技団、副団長・朱鴻興氏以下30名が当園を見学しました。
2頭のかわいいホッキョクグマの子どもたちが、はじめて皆さんの前にお目見えしました。
- 1/18. エミューが第9個目の卵を産みました。
- 1/19. 治療のかいもなくメスのマレーグマが肺炎で死亡しました。
マレーバクのメスが足にすり傷を数カ所つ

- くっていましたので治療を開始しました。
- 1/20. トラが子どもを4頭出産しました。
タンチョウのヒナの性別を調べるため、採血しました。
ニューカッスル病のワクチンを、キジ舎、水禽放養舎の鳥たちに接種しました。
セキショクヤケイ、ハイイロクジャクの展示をキジ舎で始めました。
ワシミミズクが産卵しました。また、エミューも産卵し、これで10卵目となりました。
- 1/23. ウーダン3羽と東天紅1羽をマクジャク舎で展示することになりました。
- 1/24. ブラックバックがメスの仔を1頭出産しました。生まれた仔は虚弱で、1人で立つこと

- ができず、親の乳も飲めそうになかったので収容舎に引き取り、人工哺育にしました。
- 1/26. タンチョウの仔の性別がメスとわかりました。
キングペンギンが産卵しました。
- 1/28. ダチョウのメスが右足を骨折したため、修復手術をおこないました。
- 1/29. ワシミミズクが2卵目を産みました。
- 1/31. 2羽のタンチョウのくちばしの根元に腫瘍ができていたので治療しました。
- 2/1. キングペンギンが抱卵中の卵を割ってしまいました。
- 2/3. トラの仔2頭衰弱死しました。さっそく残り2頭の仔を引き取り、人工哺育することになりました。

- 2/4. ビューマが1頭出産しました。
- 2/6. フンボルトペンギンが1羽ふ化しました。
アライグマメス2頭が闘争で咬傷を負いましたので治療しました。
- 2/7. カワウソウが寒さのせいか脱肛になったのですぐ手術し、入院させました。
- 2/9. フンボルトペンギンの2羽目がふ化しました。
- 2/10. カワウソウが退院しました。
人工哺育中のトラの仔が元気に育っています。
- 2/14. 冬眠していたアカミミガメが、本日目ざめました。

東アフリカ紀行 (Ⅲ)

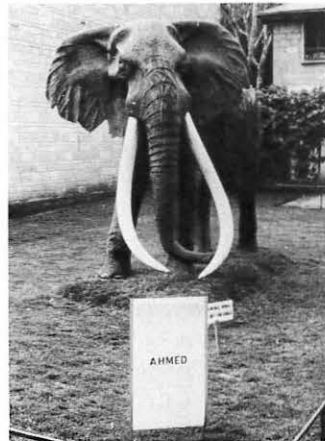
§ ナイロビ国立博物館

8月12日はナイバシャからナイロビへ向いました。途中の道路は完全に舗装された道路で約1時間30分でナイロビに到着しました。ナイロビでは国立博物館を訪れました。



ナイロビ国立博物館

この博物館は都心から少し北へ行行ったところであり、館長は人類の祖先であるオーストラロピテクスの化石を発見したことで有名なりーキー夫妻の息子で、ご自身も人類学者であるR・リーキー氏であり、そのため人類の起源に関する展示には目を引くものが多くありました。しかしなんといってもメインは動物であり、中央のホールにはジオラマに飾られた珍しいジャイアントエランドやナイルリーチェなどの大型のレイヨウ類や小型のダイカー類などの剥製が並んでいました。別館にもボンゴなどのレイヨウ類やオカピやキリンなどの剥製が展示されていました。また中庭には巨大な象牙で有名となり、映画「巨象の大陸」の主人公となった巨象アーメッドのプラスチック製の実物大の像がありました。



巨象アーメッドのプラスチック像

それら以上にすばらしかった鳥類のコレクションでした。展示の方法は単に剥製を並べているだけのものですが、ケニアの鳥類はすべて展示されているのではないかと思います。ハタオリドリやタイヨウチョウの仲間は種類数も多いためか、ところどころ名前だけのところがありました。今後全種の標本を展示しようとする姿勢がうかがえました。その他、は虫類、魚類、植物や民族学的な展示も一応そろっており、さすがイギリス領であっただけはあと思わせるほど、小さいながらよくまとまった

博物館でした。

また博物館には付属施設としてスネークパークが併設されており、多数のヘビやワニ、カメなどが飼育されていました。しかし面積も狭くあまりよい施設とは思われませんでした。時間もあまりないため、ざっとひととおり見てまわっただけで博物館をあとに次の目的地アンボセリ国立公園へと出発しました。

§ アンボセリ国立公園

アンボセリ国立公園はタンザニアとの国境に位置しており、面積は3200km²でアフリカの最高峰であるキリマンジャロが最も美しく見えるので有名な国立公園です。ナイロビからの距離は南へ約320kmあります。

国立公園の入口までは舗装道路で、快適なドライブでした。国立公園の入口にはナマンガという小



真直ぐに続く道路

な町があり、そこに着いたのは午後3時を過ぎていました。ここには観光客相手のみやげもの屋がたくさん並んでおり、マサイ族のビーズの装飾品や木彫りの動物などの民芸品を売っていました。その売り込みかたは激しく、一旦店に入ると何かを買うまでなかなか店を出してくれません。値段も正札といったものはなく、交渉しだいでいくらでも安くなるのですから驚かされます。最近では日本人も多く訪れるためか2年前に来た時に比べるとずいとうまく日本語をあやつれるようになっていました。値段なども日本語で言われるのですから、いかに日本人が多くやってくるかがわかります。ケニアでは1977年から野生動物の皮などで作った商品の販売は一切禁止されたため、この店でも象牙製品や皮革製品などは全く見られなかったのには感心しました。

ナマンガからは未舗装の道路が続き、砂ぼこりを上げながらしばらく車を走らせてゆくと右手に広大な砂漠のような光景が目に入りました。これは砂漠ではなく、この国立公園にあるアンボセリ湖だったのです。この湖は非常に浅いので乾期にはこのようになるということです。

目的地のキリマンジャロサファリロッジに到着。そこで我々を迎えてくれたのは、なんと数頭の象の群だったのです。ロッジの駐車場のすぐわきまで小

象をつれた象がやって来ていたのです。行く手をふ



我々を迎えてくれたゾウの群

さがれ、象たちが立ち去るまでしばらく待たなければなりません。結局その日は、部屋に落ちついたのは、もう午後5時を過ぎていました。

翌8月13日は朝食前の6時30分に早朝サファリに出かけました。あいにくの天気は非常に悪く、今にも雨の降りだしそうな天気でした。それでも運よく3頭のクロサイを見ることができました。クロサイは現在、生息数が非常に減少しており絶滅が心配されている動物ですが、そんなクロサイを一度に3頭も見れたのですから幸運だったといえるでしょう。し



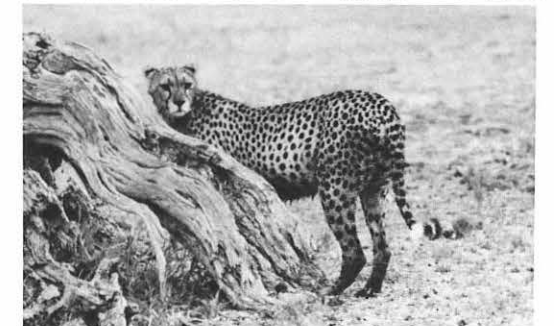
クロサイ

かし天気が悪く、暗かったため満足な写真を撮ることはできませんでした。しかしまあ満足といったところでした。乾期というのにととう雨が降りはじめ、サファリカーのサンルーフの屋根をしめなければなりません。そんなわけで早朝サファリは1時間30分ほどでロッジへ引きあげました。

午後からはゲームワarden(保護官)をむかえていろいろな話を聞くことになりました。アンボセリ国立公園では1977年頃までは密猟が横行し、アフリカゾウやクロサイが非常に減少したため、それまでの保護区から国立公園への昇格があやぶまれたので、他の国立公園や保護区から動物を導入し、国立公園に昇格したとのことでした。1年に120万人もの人々がこの国立公園を訪れるので、そのマナーが問題とのことでした。つまりアンボセリは非常に平坦な草原のため、動物を求めてサファリカーが指定された道路をはずれて走りまわるので車に踏まれた植物

が枯れ、しいては動物の餌がなくなるということが大きな問題となっている、とのことでした。国立公園内の動物の個体数を正確に把握するのは非常に困難だということでしたが、推定でアフリカゾウは約650頭、ライオンは37頭、アフリカスイギュウは450頭、チーターはわずか10頭、クロサイは12頭ぐらいであるということで、意外と動物の数が少ないことに驚かされました。しかし、1976年にはクロサイは5頭しかいなかったということなので、動物は徐々に増加しているようです。このような現地の人々の生の声を聞くことができたのはよい経験となりました。

午後4時から夕方のサファリに出かけました。このサファリではチーターを見ることができました。数頭のサファリカーが群がっているのど何がいるのかと近づいてゆくと、なんと1頭のチーターがいるではありませんか。この国立公園にはチーターはわずか10頭ほどしかいないという話を聞いたすぐ後だ



チーター

ただけに、ほんとう夢のような気がした。あつという間に数本のフィルムを使ってしまいました。我々のあとから次々とサファリカーが集ってきます。迷惑そうにチーターが移動すると、それにつれて何台ものサファリカーがその後を追うといったぐあいで、なんと言ったらよいかよく解りませんが、これでよいのだろうかという疑問を感じずにはいらませんでした。チーターの行く手にはトムソンガゼル



チーターとトムソンガゼルの群

やオグロヌーの群がいたのですが、一定距離に近づくまでは全く無関心に草を食べているのですが、そ

の距離内に入ってくると逃げだすという教科書通りの行動が見られました。

この日は朝のサファリではクロサイ、夕方のサファリではチーターを見ることができるといすばらしい一日でした。その日もアンボセリに宿泊しました。

8月14日の早朝サファリもあいにく天気が悪く、今にも泣き出しそうな空模様でした。それでも小象をつれたアフリカゾウの群は印象的でした。生後1年ぐらいの小象でしょうか、親たちと一緒に歩いて



かわいい小象

いるのですが、鼻を振りながら歩く姿はとても可愛いらしいものでした。小象をまん中に、おとなのゾウがかばうように歩く姿は、ゾウの愛情の深さを感じさせられました。

ゾウのほかにもセグロジャッカルやイボイノシシ、インパラなども見ることができました。鳥ではアフリカオオノガン、ハゲノドシャコ、ナミコブジサイチョウなどが姿を見せました。



アフリカオオノガン

ロッジへ戻ると、可愛いサバンナモンキーの群がやってきていました。屋根の上に乗って日なたぼっこをしていました。なかには可愛い赤ちゃんを抱いたものもいました。子供たちは遊び好きで木にぶらさがったりして遊んでいました。日本の野猿公園のように餌付けをしているわけではなく、餌をやることは禁止されているのですが、やはり餌をやる人は多いようで、猿たちは人によく慣れていました。

朝食の最中に雲から姿を出したキリマンジャロを見つけ。我々は食事を中断し、あわてて食堂を飛び

出し、しばしキリマンジャロをバックに記念撮影をしました。少し落ちついてまわりを見てみると外へ飛び出したのは、ほとんど日本人ばかりで、まさに日本人の性格の一面を見たような気がしました。いったい外国人の目にはこの



サバンナモンキーの親子

光景がどのようにうつったのでしょうか。



キリマンジャロ

食事後、マサイ族の村を訪れました。マサイ族は現在でも家畜と共に遊牧をしている民族で、ケニアからタンザニアにかけて住んでいます。勇気ある戦士として有名だった民族です。マサイ族は写真を撮られると魂をうばわれると思っているので、写真を



マサイの戦士

非常にいやがるのであらかじめ交渉し、いくらのお金を支払って村の中へ入りました。それでもやはり写真が恐いのか、あつという間に女の人や子供は小屋の中へ隠れてしまい、残ったのは男ばかりでした。村のまわりにはとげのある植物で囲まれており、ライオンなどの猛獣を防ぐようになっていました。小屋は彼らの飼っている牛の糞で作られており、村中、牛糞だらけで、少々閉口しました。

アンボセリ国立公園での3日間の予定も終り、再びナマンガを経てナイロビへ戻りました。チーターとクロサイ、そしてキリマンジャロとすばらしい3

日間でした。

§ ナイロビ国立公園

8月15日は午前9時にホテルを出発し、最後のサファリとしてナイロビ国立公園を訪ねました。この



ナイロビ国立公園のメインゲート

国立公園はナイロビの都心からわずかに12kmしか離れておらず、およそ30分で到着しました。広さは113km²とあまり広くはありませんが、山あり谷ありの変化に富んだ地形のすばらしい国立公園でした。動物もゾウ以外の主な動物は生息しているとのこと。しかし、なんといっても都心からこんな近くに野生動物がたくさんいる国立公園があるということはすばらしいことでした。この国立公園は道路や道標が整備されており、管理がゆきとどいてるのでちょっと野生味に欠けますが、また一味違ったサファリでした。ゲートに入って最初に見たのはマサイキリンでした。そしてケニアを訪れた日から見たいと思っていたヘビクイワシにも出会うことができました。我々がカメラを向けると足早に草の中に隠れてしまいました。この鳥は飛ぶことよりも歩くことの方が得意なようでした。展望台で下車したところ



ヘビクイワシ

特にコークスハーテピーストの数は多いようでした。そして一瞬ですがブッシュバックも見ることができました。

§ 動物孤児院 (アニマル・オーファネージ)

国立公園を一順して最後にメインゲートの横にある動物孤児院を訪れました。この施設は1963年に設立され、ケニア全土の国立公園や保護区で保護され



動物孤児院

たみなし子や負傷した動物を収容しており、再び野生に帰す仕事をしています。面積はわずか30haと広くはありませんが、自然保護のために役立っています。そんな施設ですので、収容されていた動物の顔ぶれも2年前に訪れた時とはすっかり変わっていました。エランドやウォーターバック、インパラの子供たちが保護されていました。チーターやライオン、ヒョウなどの猛獣たちも収容されていましたが、高さ約3mの金網に囲まれているだけでした。特にヒョウなどは大きな木に登って寝ており、ちょっとジャンプすれば逃げ出せるのではないかとと思われるほどでした。

園内に入ったところに、“ここは動物園ではありません”という看板が目に入りましたが、私の目に



“孤児院は動物園ではありません”

はここは立派な動物園であるように思われました。園内には小学生の団体が目立ち、日本の動物園と同じような光景を見うけました。正に動物園の目的である社会教育と自然保護の役割を果たしているようでした。

ナイロビ国立公園を最後に、私の10日余りにわたる東アフリカの旅は終わりました。2回目のアフリカ旅行も非常に満足のゆく旅で、あつという間に終わってしまいました。帰りの飛行機の中では、もうまた再びアフリカを訪れてみたいという気持ちから来ていました。

(おわり)

(飼育課：榊原 安昭)

北米通信員だより ③

動物園と大学

オクラホマ州は米国の中央にあるため、鳥類は東部、西部の両方のものが見られ、私のいる州北部の大学町では種類、量ともに豊富で、州の鳥 Scissor Tailed Fly Catcher やハチドリなど林の中でごくふつうに見られ、同好の士と散歩するのが楽しみです。

オクラホマ・シティー動物園には私がこちらで所属する州立大学獣医学部の教授や大学院生達と共にやって来ました。同じ大学院生仲間で寄生虫病学専攻のポール・ウェルチ君がこの動物園からうけている研究奨学金の更新のために動物園で研究発表するというので、これを応援かたがた聞きに行ったのです。オクラホマ・シティー動物園は全米でも有数の大動物園で、ことに全米で唯一のマウンテンゴリラの番いを飼育していることは有名で、日本にいる時から私は訪門を楽しみにしていました。講演に先だって事務所を訪れ、私のこちらでの指導教官で、ここの動物園協会の学術委員長でもあられるコーストベット教授にポールと私はカーチス園長をはじめ主だったスタッフに紹介していただきました。同教授はこの動物園と州立大学との窓口の役割を長年にわたって果しておられる数少ない方々の一人です。



左から私、カーチス園長、コーストベット教授、教育課長、ポール・ウェルチ君

講演は園内の一隅にある教室で（こういった教室は今迄に訪れた米国の動物園のすべてで見かけました。）園内のスタッフの他、手あきの飼育係の方々も10名ばかり集まれ、大学からの聴講者を合わせると、最終的には聴衆は30名近くになりました。

講演の内容は、園内で死亡した動物の腸内寄生虫を過去2年間にわたって調べたところ、数種の寄生虫について園内での感染が、異種の動物にもひろがりつつあるという事実が明らかになったというもので、園の人々にとっては少なからずショッキングな

内容でした。園の職員の方々、ことにカーチス園長は動物学畑の御出身でもありこういったことにも造詣が深く、手きびしい質問を次々と放っておられました。報告自体はきわめて満足のゆくものであったようです。彼はこれで来年も動物園の4人の奨学生の1人として年間1200ドルを手に入れることが確実となりました。このように時に動物園側が、大学側へ手を差し伸べることもあれば、逆に有益な情報（動物学、獣医学、生態学）を大学から園に提供することも多いということで、両者の協力関係は天王寺動物園と大阪市立大学や大阪府立大学とのそれよりも密なものであります。獣医学部の人々は常に、動物園でおこなったことについて注意を払っています。（ちなみに州内のもう一方のタルサ動物園では大学とそれほどの交流はないと副園長の川田氏から伺ったことがあります。）



熱心に講演を聞く動物園のスタッフと大学関係者

講演を無事終えたポールが私をさそってこの園内を散歩かたがた短い時間でしたがまわってくれました。ガラパゴス館などはすばらしい施設で、サバンナでもここならではの動物が見られました。マウンテンゴリラは寝ていてよく見えませんでした。がたしかにいました。園内は広大でとても1時間では半分さえまわることができません。残念ながら次の機会を待つこととして招待されていた動物園協会の昼食会の場へと急ぎました。場所は事務所の二階…というよりは市の教育委員会の建物の中でした。

会場には30人余りの協会員が集まっておられ、ポールと私は教授から紹介をうけました。後援活動はたいへん活発なように見うけられました。

園長、教育課長、それに協会の教育活動担当者がこの次には教育事業に関する情報の提供を約束して下さいました。時間と足の便さえあれば、この町から100km南の園に通いつめたいところなのですが…

（つづく）

（大阪動物園ボランティアズ会員：富樫 史郎）

動物園ニュース

§ 人工哺育、相次ぐ!!

ブラックバックとトラが人工哺育で順調に育っています。

1月24日、ブラックバックのメスが1頭誕生しました。しかし、あいにく小雨まじりで寒いためなかなか自力で立つことができなかったため、一時収容舎に収容し人工哺育することになりました。最初なかなかミルクを飲まず苦労しましたが、今では順調に成長しています。誕生時3kgだった体重も生後20日目には5kgになりました。暖かい日には運動のため散歩させると、飼育係のまわりを元気よく走りまわっています。ブラックバックの人工哺育は日本では初めてと思われま



人工哺育中のブラックバック

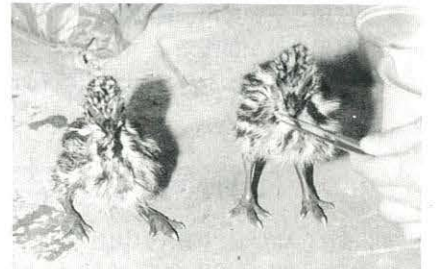
一方トラは1月20日に4頭生まれましたが、2月3日に2頭が衰弱で死亡したため、早速残りの2頭を人工哺育することになりました。トラ

月7日にはブラックバックがもう1頭生まれ、これは親のもとで順調に育っています。同じ7月にはヤギ2頭も生まれています。

また1月中旬頃からオグロワラビーの赤ちゃんが袋からかわいい顔を出し始めました。母親は昭和53年に当園で生まれたものですので、動物園での三代目が誕生したわけですね。オグロワラビーを追いかけのようにアカカンガルーの赤ちゃんも2月中旬から袋から顔を出すようになりました。動物園を訪れた際にはぜひごらんください。

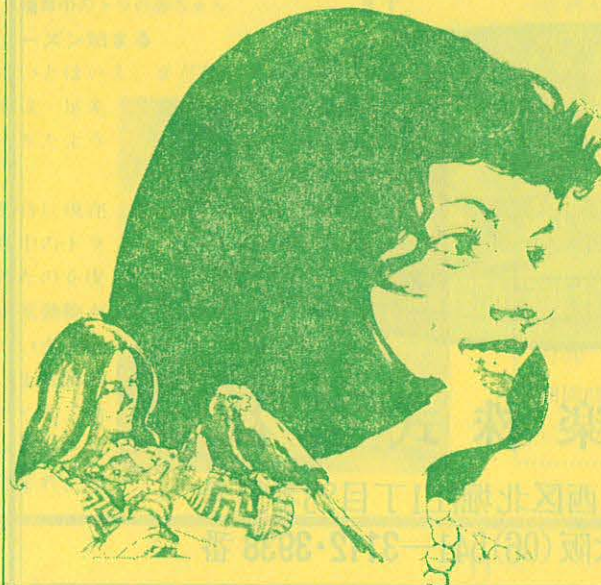
鳥類では、1月22日、29日の両日にワシミズクが産卵し抱卵中です。この“なきごえ”が出るころには孵化しているかもしれません。一方、先月のニュースでお知らせしたエミューも、2月15日に2羽が孵化しました。

続く17月2日にも1羽が孵化しました。餌付けもうまくゆき順調に成育しています。全部で12個の卵が孵卵機に入



エミューのヒナ

くらしを彩るショッピング



近鉄百貨店

アベノ店 (06) 624-1111・上本町店 (06) 779-1231
東京近鉄 (0422) 21-3331

・近鉄百貨店グループ

大阪(アベノ・上本町)・東大阪・奈良・京都・岐阜
枚方・四日市・和歌山・徳山・別府・東京(吉祥寺)

北米通信員だより ③

動物園と大学

オクラホマ州は米国の中央にあるため、鳥類は東部、西部の両方のものが見られ、私のいる州北部の大学町では種類、量ともに豊富で、州の鳥 Scissor Tailed Fly Catcher やハチドリなど林の中でごくふつうに見られ、同好の士と散歩するのが楽しみです。

オクラホマ・シティー動物園には私がこちらで所属する州立大学獣医学部の教授や大学院生達と共に行って来ました。同じ大学院生仲間で寄生虫病学専攻のポール・ウェルチ君がこの動物園からうけている研究奨学金の更新のために動物園で研究発表するというので、これを応援かたがた聞きに行ったのです。オクラホマ・シティー動物園は全米でも有数の大動物園で、ことに全米で唯一のマウンテンゴリラの番いを飼育していることは有名で、日本にいる時から私は訪門を楽しみにしていました。講演に先だって事務所を訪れ、私のこちらでの指導教官で、この動物園協会の学術委員長でもあられるコーストベット教授にポールと私はカーチス園長をはじめ主だったスタッフに紹介していただきました。同教

内容でした。園の職員の方々、ことにカーチス園長は動物学畑の御出身でもありこういったことにも造詣が深く、手きびしい質問を次々と放っておられましたが、報告自体はきわめて満足のものであったようです。彼はこれで来年も動物園の4人の奨学生の1人として年間1200ドルを手に入れることが確実となりました。このように時に動物園側が、大学側へ手を差し伸べることもあれば、逆に有益な情報(動物学、獣医学、生態学)を大学から園に提供することも多いということで、両者の協力関係は天王寺動物園と大阪市立大学や大阪府立大学とのそれよりも密なものであります。獣医学部の人々は常に、動物園でおこなったことについて注意を払っています。(ちなみに州内のもう一方のタルサ動物園では大学とそれほどの交流はないと副園長の川田氏から伺ったことがあります。)



動物園ニュース

§ 人工哺育、相次ぐ!!

ブラックバックとトラが人工哺育で順調に育っています。

1月24日、ブラックバックのメスが1頭誕生しました。しかし、あいにく小雨まじりで寒いためなかなか自力で立つことができなかつたため、一時収容舎に収容し人工哺育することになりました。最初なかなかミルクを飲まず苦労しましたが、今では順調に成長しています。誕生時3kgだった体重も生後20日目には5kgになりました。暖かい日には運動のため散歩させると、飼育係のまわりを元気よく走りまわっています。ブラックバックの人工哺育は日本では初めてと思われま



人工哺育中のブラックバック

一方トラは1月20日に4頭生まれましたが、2月3日に2頭が衰弱で死亡したため、早速残りの2頭を人工哺育することになりました。トラ



人工哺育中のトラの赤ちゃん

の人工哺育は何度も経験があるので、たいした問題もなく順調に育っています。

§ 出産シーズン始まる

春が近いとはいえ、まだ寒い日が続きますが、動物園の春は一足先にやってきたようです。

1月20日に現在人工哺育中のトラが生まれたのを皮切りに出産動物が相次いでいます。その後、1月24日には同じく人工哺育中のブラックバックが生まれ、2

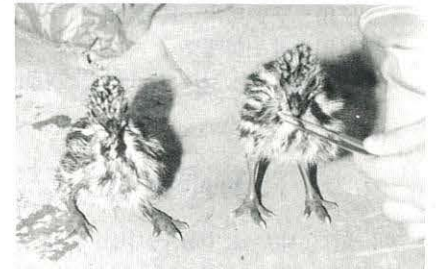


オグロワラビー

月7日にはブラックバックがもう1頭生まれ、これは親のもとで順調に育っています。同じ7月にはヤギ2頭も生まれています。

また1月中旬頃からオグロワラビーの赤ちゃんが袋からかわいい顔を出し始めました。母親は昭和53年に当園で生まれたものですので、動物園での三代目が誕生したわけです。オグロワラビーを追いかけられるようにアカカンガルーの赤ちゃんも2月中旬から袋から顔を出すようになりました。動物園を訪れた際にはぜひごらんください。

鳥類では、1月22日、29日の両日にワシミミズクが産卵し抱卵中です。この“なきごえ”が出るころには孵化しているかもしれません。一方、先月のニュースでお知らせしたエミューも、2月15日に2羽が孵化しました。



エミューのヒナ

続く17月2日にも1羽が孵化しました。餌付けもうまくゆき順調に成育しています。全部で12個の卵が孵卵機に入っていますので、これからもどんどん孵化することでしょう。

3月に入るとキジ類も産卵を開始しますので、ますます忙しくなりますが、動物園にとってとても素晴らしい季節の始まりといえるでしょう。

§ タンチョウのヒナの性別鑑定

当園では毎年タンチョウのヒナの性別を染色体で調べています。今年も1月20日に昨年生まれのヒナの性別を調べるために採血しました。その結果、昨年のヒナは雌とわかりました。これで当園のタンチョウは雄が4羽、雌が6羽の計10羽となりました。

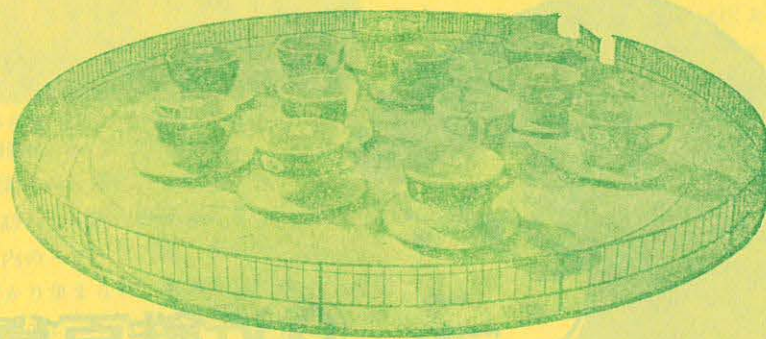
休園日のお知らせ

動物園の休園日は毎月第3月曜日です。6月までの休園日は下記の通りです。

3月16日(月)、4月20日(月)、5月18日(月)、6月15日(月)

開園時間は9時半～5時で、4時に切符売止めになります。

遊園施設委託経営・製作・販売



久竹娛樂株式会社

本社 工場 大阪市西区北堀江1丁目23番21号
電話 大阪(06)541-3112・3938 番

なきごえ 昭和56年3月15日発行(毎月1回15日発行)

編集/大阪市天王寺動物園

発行人/大阪市天王寺動物園協会 和田辰巳

印刷所/株式会社 松村善進堂 定価100円(送料共)

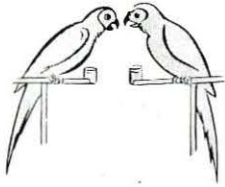
第17巻 第3号(通巻186号)

〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74

電話 大阪 (06)771-0201

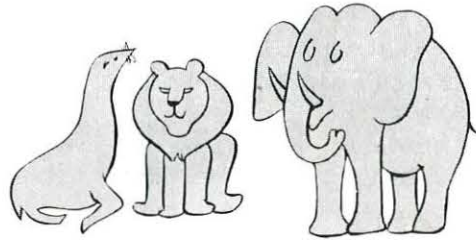
振替口座 大阪 37823

1年継続(12部)1,100円(送料共)



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達



- ・医学実験用動物
- ・愛玩犬、猫直輸入
- ・宣伝用、テレビ用、貸動物
- ・教材用鳥獣剥製販売
- ・原色世界雑類図鑑(34種1枚もの)要郵便券150円・鳥獣価格表100円

有限会社 吉川商会

本社 神戸市生田区中山手通三丁目二八番地 電話(078)221-8195・221-1517
 飼育場 神戸市葺合区神仙寺通三丁目一番地 電話(078)241-3494



自然の
おいしさ

全糖

- 合成甘味料・合成保存料・合成糊料・合成着色料はいっさい含まれていません。



雪印ヨーグル

各130c.c.=90円

パイン・オレンジ・ストロベリー・フルーツカクテル

編集委員

橋本 一郎・土井 良彦・樽本 勲・中川 哲男・宮下 実・長瀬健一郎・柳原 安昭・森本 泰利・大野 尊信
 葦谷 文彦・農本 武志・野口 秀高・仲谷 登・高橋 真三・板野 健一・石島 宏胤・柴田 総